

しのびごと

謹んで、比治山学園長故国信玉三先生のみ霊の御前に申し上げます。

昨日午前八時先生が急性心不全のためお亡くなりになったとお知らせにより、取るものも取りあえずお宅に参上いたしました。御家族のお話によりますと、さしたるお苦しみもなく、まことに安らかな御最期だったとのことでしたが、やさしさ溢れるお顔を拝見しますと、大往生とはこのような最期を申すのであろうと納得したことでした。享年九十五歳でいらっしやいました。昭和五十七年秋以来五年余の長期にわたる療養生活にもかかわらず、御家族の昼夜を分たぬ献身的な御看護のせいで、いささかの床擦れも見られないとのこと。いつかお見舞に上がった時、御家族の言われる所によりますと、睡眠を十分お取りになれない頃だったようですが、深夜ひそかに御病床を伺われると、かえって先生の方から、心配しないで早く休むようにとのお言葉がかかったとのことでした。その時私は、先生はずでに、われわれ凡愚の遠く及ばない、高い悟得の

境に到っていられるのではないかと拝察したことでした。

先生は、明治二十六年二月五日、沖本丈助さんとタミさんとの間に、五男として誕生されました。長じて岡山県立農学校に学ばれ、さらに鹿児島高等農林学校に進まれましたが、そこを最優秀の成績で卒業され、直ちに抜擢されて母校の助教授となられました。先生は学究心やみがたいものがあって、進んで東京帝国大学農学部農芸化学科において、有名なビタミンBの発見者鈴木梅太郎博士のもとので、専ら生化学の研究に携わられました。しかし、やむない家庭の御事情により広島にお帰りになり、懇請されて広島県師範学校教諭となられました。ここに先生の教育者としての人生が始まることになりました。学究から教育実践への軌道修正について、後年先生は、「青春時代は学問で身を立てようと考えたこともあった」が、「縁あって、教育界一筋に歩んで来たことになった」と述懐していられます。そしてそのことについては、「今は一抹の後悔もなく、むしろ、この道を与えられたことを限りなく感謝している」とも言っておられます。そこに先生の面目躍如たるものがあります。広島師範時代は前後二十一年つづきますが、この間先生の御薫陶により、多くの俊秀が教育界に送り出され、それらの人たちによって、県下の教育界がリードされた時期のあった事實は、特筆されてよいと思います。

昭和十六年、それまで広島文理大・広島高師の教育実習校として発足していた広島昭和高等女学校へ、先生は懇望されてその校長として移られました。やがて校名を比治山高等女学校と改め

られ、戦後になって新たに比治山女子中学校が併設されましたが、間もなく、比治山女子高等学校が開設され、高等女学校は廃止されました。その間に、従来の財団法人広島昭和学園が学校法人比治山学園と改称されて、今日に至っているわけです。

昭和四十一年、比治山女子中学・高校の保護者の強い希望によって、比治山女子短期大学が発足し、先生はその初代学長になりました。国文科・幼児教育科・家政科・美術科のほかに、付属幼稚園も併設されました。

私ども、比治山学園に職を奉ずる者は、ひとしく先生が一貫して堅持して来られた教育方針に則り、同時にまた、激変する社会状況に対応する教育実践を推進して今日に至っておりますが、そのことをまた心から誇りに思ってもおります。先生の教育方針は、深遠な宗教観の裏付けを持ち、その宗教観は、生命哲学と一体をなしております。そして、その源には、慈しみ深く、宗教学の厚い母君のおられることを思わないではいられません。先生の教育方針の核心が「親心に帰る」であることを思います時、その「親心」の自覚について、先生が、随想集『柔軟心』の「自序」で、「私が教育の仕事に携わらせていただいたことが、私のこの生命の中から、この親心を芽生えさせていただいたのではないか」といっていられることも、ここで改めて思い出されます。

国信玉三先生、今生で先生の現身うつしみに再びお目にかかることは叶いませんが、先生が、私どもにもお示し下さった教育方針こそ、混迷せる現下の教育の行く手を照らす、かけがえのない灯火とな

ることを固く信じ、それに導かれてたゆまぬ精進をしてまいりたいと存じます。そのことを、ここに改めてお誓いいたします。

一九八六年、七六・〇二年ぶりに現われるハレー彗星を、比治山女子高校卒業生と一緒に見る約束をしたことを、今も忘れてはいない、と米寿のお祝いの時おっしゃいました。先生は、稀に見る本質的なロマンティストでいらっしやうと、今にして思います。

国信家の玄関先には、早春の明かるい日射しを受けて、白木蓮の花が、今を盛りの美しさに輝いています。その花たちが、間もなく永久とくの旅に立たれる先生のお柩を、あたたかく見送ってくれることでしょう。

追記

昭和六十三年四月一日、御自宅で葬儀が営まれた際、御霊前で私が読ませていただいた弔辞を、ほぼそのままここに掲載させてもらった。

なお、国信先生が御生前こよなく心引かれ、成田為三氏に作曲を委嘱して生徒たちにも愛誦させられた行基菩薩の「ほろほろと」の原歌は、

山鳥のほろほろとなく声きけば父かと思ふ母かと思ふ

で、鎌倉時代の勅撰集『玉葉和歌集』巻十九に載っている。その前に出た鴨長明の『方丈記』にも、「山鳥のほろほろと鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ……」と出ており、奈良時代の高僧行基の詠として、古くから伝誦されていたらしい。

(昭和六三・六)